

姨捨山

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、信濃国しなののくにに一人ひとりの殿様とのさまがありました。殿様とのさまは大そうおじいさんやおばあさんがきらいで、

「年寄としよりはきたならしいばかりで、国くにのために何なんの役やくにも立たない。」

といつて、七十を越こした年寄としよりは残のこらず島流しまながしにしてしまいました。流ながされて行なつた島しまにはろくろく食たべるものもありませんし、よしあつても、体からだの不自由ふじゆうな年寄としよりにはそれを自由じゆうに取とつて食たべることができませんでしたから、みんな行くとすぐ死しんでしまいました。国くに中の人は悲かなしがつて、殿様とのさまをうらみましたけれど、どうすることもできませんでした。

すると、この信濃国しなののくにの更科さらしなという所ところに、おかあさんと二人ふたりで暮くらしている一人ひとりのお百姓ひゃくしょうがありました。ところがおかあさんが今年七十ことしになりますので、今いまにも殿様とのさまのけらいけらいが来きてつかまえて行きはしないかと、お百姓ひゃくしょうは毎まい日にちそればかり気きになつて、畑はたけの仕事しごともろくろく手がつきませんでした。そのうちとうとうがまんができなくなつて、

「無慈悲な役人なんぞに引きずられて、どこだか知れない島に捨てられるよりも、これはいっそ、自分でおかあさんを捨てて来た方が安心だ。」と思うようになりました。

ちようど八月十五夜の晩でした。真ん丸なお月さまが、野にも山にも一面に照っていました。お百姓はおかあさんのそばへ行つて、何気なく、

「おかあさん、今夜はほんとうにいい月ですね。お山に登つてお月見をしましょう。」
 といつて、おかあさんを背中におぶつて出かけました。

さびしい野道を通り越して、やがて山道にかかりますと、背中におぶさりながらおかあさんは、道ばたの木の枝をぽきんぽきん折つては、道に捨てました。お百姓はふしぎに思つて、

「おかあさん、なぜそんなことをするのです。」

とたずねましたが、おかあさんはだまつて笑つていました。

だんだん山道を登つて、森を抜け、谷を越えて、とうとう奥の奥の山奥まで行きました。山の上はしんとして、鳥のさわぐ音もしません。月の光ばかりがこうこうと、昼間のように照り輝いていました。

お百姓は草の上におかあさんを下ろして、その顔をながめながら、ほろほろ涙をこ

ぼしました。

「おや、どうおしだ。」

とおかあさんがたずねました。お百^{ひやくしやう}姓^{りやうて}は両^{りやうて}手^てを地^ちにつけて、

「おかあさん、堪^{かん}忍^{にん}して下^{くだ}さい。お月^{つき}見^みにといつてあなたを誘^{さそ}い出^だして、こんな山^{やま}奥^{おく}へ連^つれて来^きたのは、今^{ことし}年はあなたがもう七十になつて、いつ島^{しま}流^{なが}しにされるか分^わからないので、せめて無^む慈^じ悲^ひな役^{やく}人^{にん}の手^てにかけると思^{おも}つたからです。どうぞがまんして下^{くだ}さい。」

といいました。

するとおかあさんは驚^{おどろ}いた様子^{ようす}もなく、

「いいえ、わたしには何^{なに}もかも分^わかつていました。わたしはあきらめていますから、お前^{まえ}は早^{はや}くうちへ帰^{かえ}つて、体^{からだ}を大^{だい}事^じにして働^{はたら}いて下^{くだ}さい。さあ、道^{みち}に迷^{まよ}わないようにして早^{はや}くお帰^{かえ}り。」

といいました。

お百^{ひやくしやう}姓^{しやう}はおかあさんにこういわれると、よけい氣^きの毒^{どく}になつて、いつまでもぐずぐず帰^{かえ}りかねていましたが、おかあさんに催^{さい}促^{そく}されて、すぐすぐ帰^{かえ}つて行^いきました。

道々みちみち捨ててある木の枝えだを頼りにして歩いて行きますと、長い山道やまみちにも少しも迷わずにうちまで帰かえりました。「なるほど、さつきおかあさんが枝えだを折おつて捨てて歩いたのは、わたしが一人で帰るとき、道に迷わなかったための用心ようじんであつたか。」と今更いまさらおかあさんの情けがしみじみうれしく思われました。そんな風でいったん帰りは帰つたものの、縁えんぎ先に座すわつて、一人ぼつねんと山の上の月をながめていますと、もうじつとしていられないほど悲かなしくなつて、涙なみだがぼろぼろ止めどなくこぼれてきました。

「あの山の上で、今ごろおかあさんはどうしていらつしやるだろう。」

こう思うともうお百ひゃくしやう姓はどうしてもこらえていられなくなりました。そこで夜更よふけにはかまわず、またさつきのしおり道みちをたどつて、あえぎあえぎ、おかあさんを捨てて来た山奥やまおくまで上あがつて行きました。そこに着ついてみると、おかあさんはちゃんと座すわつたまま、目をつぶっていました。お百ひゃくしやう姓はその前に座すわつて、

「おかあさんを捨てたのはやはりわたくしが悪わるうございました。こんどはどんなにしてもおそばについてお世話せわをいたしますから。」

といつて、おかあさんをまたおぶつて山を下くだりました。

それにしてもこのままおけば、いつか役人やくにんの目にふれるに違いありません。お百ひゃくし

姓ようはいろいろ考かんえたあげく、床ゆかの下に穴あな倉ぐらを掘ほつて、その中におかあさんをかくしました。そして毎まい日にち三度三度どどござんを運はこんで、

「おかあさん、御窮屈ごきゆうくつでも、がまんをして下さい。」

と、いろいろにいたりました。これでさすがの役人やくにんも氣きがつかずにいました。

二

それからしばらくすると、ある時ときお隣の国くにの殿様とのさまから、信濃国しなののくにの殿様とのさまに手紙てがみが来きました。あけてみると、

「灰はいの縄なわをこしらえて見みせてもらいたい。それが出来できなければ、信濃国しなののくにを攻めほろぼしてしまおう。」

と書いてありました。その国くには大そう強つよくつて、戦争せんそうをしてもとても勝かつ見込みみこみがありませんでした。殿様とのさまは困こまつておしまいになつて、家来けらいたちを集あつめて御相談ごそうだんなさいました。けれどだれ一人灰ひの縄なわなんぞをこしらえることを知しっている者ものはありませんでした。そこでこんどは国くに中じゅうにおふれを出だして、

「灰の縄をこしらえてさし出したものには、たくさん褒美をやる。」

と、告げ知らせました。

すると、何しろ灰の縄が出来なければ、今にもこの国は攻められて、ほろぼされてしまうというので、国中のお百姓は寄るとさわるとこの話ばかりしました。

「だれか灰の縄をこしらえる者はないか。」

こういつてさわぐばかりで、一向にいい考えは出ませんでした。

お百姓はふと、「これはことによつたらうちのおかあさんが知っているかも知れない。」と思いつきました。そこで、そつと穴倉へ行つて、おふれの出たことを詳しく話しますと、おかあさんは笑つて、

「まあ、それは何でもないことだよ。縄によく塩をぬりつけて焼けば、くずれないものだよ。」

といいました。

お百姓は、「なるほど、これだから年寄はばかにできない。」と心の中で感心しました。そしてさつそくいわれたとおりにして、灰の縄をこしらえて、殿様の御殿へ持つて行きました。殿様はびつくりして、御褒美のお金をたと下さいました。

とても出来まいと思つた灰の縄を出して渡されたので、お隣の国の使いはへいこうして逃げて行きました。

三

しばらくすると、またお隣の国の殿様から、信濃国へお使いが一つの玉を持つて来ました。いっしょにそえた手紙を読むと、この玉に絹糸を通してもらいたい。それが出来なければ、信濃国を攻めほろぼしてしまふと書いてありました。

殿様はそこで、その玉を手につけてよくぐらんになりますと、玉の中にごく小さな穴が曲がりくねつてついていて、どうしたつて糸の通るはずがありませんでした。殿様は困つて、また家来たちに御相談なさいましたが、家来たちの中にもだれ一人、この難題をとく者はありませんでした。そこでまた国中へおふれを出して、曲がりくねつた玉の穴に絹糸を通す者があつたら、たくさん褒美をやると告げ知らせました。これまた国中のさわぎになりました。けれどやはりだれにも変わつた智慧の持ち合わせはありませんでした。

すると、こんどもお百姓ひやくしやうは穴倉あなぐらへ行つて、おかあさんに相談そうだんをかけました。おかあさんは笑わらつて、

「何でもないことだよ。それは、玉たまの片かたかたの穴あなのまわりにたくさん蜂蜜はちみつをぬつておいで、絹糸きぬいとに蟻ありを一匹びきゆわいつけて、別の穴べつあなから入れてやるのです。すると蟻ありは蜜みつの香かほりを慕したつて、曲まがりくねつた穴あなの道みちを通とおつて、先さきへ先さきへと進すすんでいくから、それについて糸いともこちらの穴あなから向むこうの穴あなまでつき抜ぬけてしまうようになるのだよ。」

といい聞きかせました。

お百姓ひやくしやうはそう聞きくと小踊りこおどをして、さつそく殿様とのさまの御殿ごてんへ行つて、首尾しゆびよく玉たまの中なかへ絹糸きぬいとを通とおしてお目めにかけました。

殿様とのさまはびつくりして、こんどもお百姓ひやくしやうにたくさん、御褒美ごほうびのお金かねを下くださいました。お隣となりのお使つかいは絹糸きぬいとのりつぱに通とおつた玉たまを返かえしてもらつて、へいこうして逃にげていきましました。その使つかいが帰かえつて来くると、お隣となりの国の殿様とのさまも首くびをかしげて、

「信濃国しなののくににはなかなか知恵者ちえしやがあるな。これはうっかり攻めせられないぞ。」
と考かんがえていました。

こちらでも、さすがにこれてきで敵てきもあきらめて、もう来こないだろうと思おもつていました。

四

ところがしばらくすると、またお隣の国の殿様から、信濃国へお使いが手紙を持ってきました。手紙といつしよに二匹の牝馬を連れて来ました。

「いつたい馬なんぞを連れて来てどうするつもりだろう。」とびくびくしながら、殿様が手紙をあけてごらんになりますと、二匹の馬の親子を見分けてもらいたい。それができなかったら、信濃国を攻めほろぼしてしまふと書いてありました。殿様はまた、連れて来た二匹の馬をごらんになりますと、大ききから毛色まで、瓜二つとってもいいほどよく似た馬で、同じような元氣ではねていました。殿様はお困りになって、また家来たちに御相談をなさいました。それでもだめなので、また国中におふれを回しまして、「だれか馬の親子を見分けることを知っているか。うまく見分けたものには望みの褒美をやる。」

と告げしらせました。

また国中の大さわぎになつて、こんどこそうまく当てて、御褒美にありつこうと思

う者が、そろそろ殿様の御殿へ、お隣の国から来た二匹の牝馬を見に出かけました。ところかよほど見分けにくい馬と見えて、名高いばくろうの名人でも、やはり首をかしげて考え込むばかりでした。そこでお百姓はまた穴倉へ行つて、おかあさんに相談しますと、おかあさんはやはり笑つて、

「それもむずかしいことではないよ。亡くなったおじいさんに聞いたことがある。親子の分らない馬は、二匹を放しておいて、間に草を置けばいい。するとすぐ草にとりついて食べるのは子供で、ゆるゆると子供に食べさせておいたあとで、食べ余しを食べるのは母親だということだよ。」

と教えました。

お百姓は感心して、さつそく殿様の御殿へ行つて、

「ではわたくしに見分けさせて下さいまし。」

といつて、おかあさんに教わつたとおり、二匹の馬の間に青草を投げてやりますと、案の定、一匹ががつがつして草を食べる間、もう一匹は静かに座つたままながめていました。それで親子が分かつたので、殿様はそれぞれに札をつけさせて、

「さあ、これで間違いはないでしょう。」

「といって、使つかいにつきつけますと、使つかいは、

「どうも驚おどろきました。そのとおりです。」

「といって、へいこうして逃にげていききました。」

殿とのさま様はこれでまったく、お百ひやくしやう姓ちえの智恵こころに心から驚おどろいてしまいました。

「お前まえは国くに中じゆう一いちばんの智恵ちえ者しやだ。さあ、何なんでも望のぞみのものをやるぞ。」

とおつしやいました。お百ひやくしやう姓ちえはこんどこそ、おかあさんの命いのちごいをしなければなら

ないと思おもつて、

「わたくしはお金かねも品物しなモノもいりません。」

「いいますと、殿とのさま様は妙みような顔かおをなさいました。お百ひやくしやう姓ちえはすかさず、

「その代かわりどうか母ははの命いのちをお助たすけ下さい。」

「といって、これまでのことを残のこらず申もうし上げました。殿とのさま様はいちいちびつくりして、

目めを丸まるくして聞きいておいでになりました。そして灰はいの縄なわも、玉たまに糸いとを通とおすことも、それか

ら二匹ひきの牝馬めうまの親子おやこを見分みわけたことも、みんな年寄としよりの智恵ちえで出来できたことが分わかると、殿との

様さまは今更いまさらのように感かん心しんなさいました。

「なるほど年寄としよりというものもばかにならないものだ。こんど度々たびたびの難題なんだいをのがれた

のも、年寄のお陰であつた。母親をかくした百姓の罪はむろん許してやるし、これからは年寄を島流しにすることをやめにしよう。」
 こう殿様はおっしゃつて、お百姓にたくさんの御褒美を下さいました。そして年寄を許すおふれをお出しになりました。国中の民は生き返つたようによろこびました。

となりくにの殿様もこんどこそ大丈夫と思つて出した難題を、またしてもわけなく解かれてしまったのがっかりして、それなり信濃国を攻めることをおやめになりました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：土屋隆

2006年9月21日作成

2009年9月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

姨捨山

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>